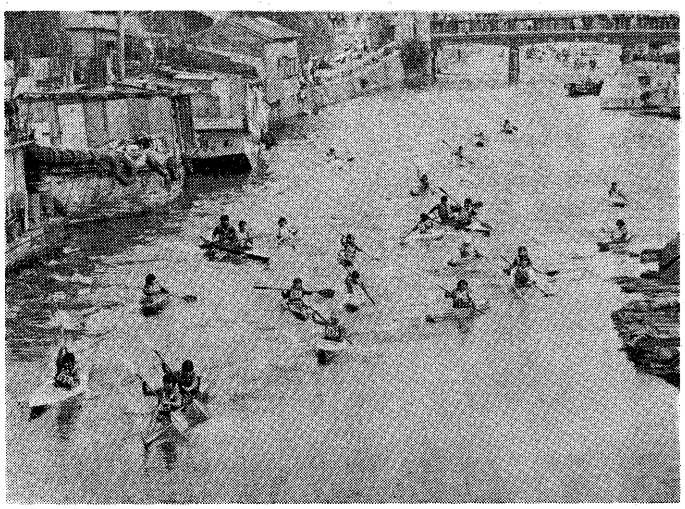
写真―2　カヌーフェスティバル（三吉橋附近）



旨に賛同し、様々な形で協力してくれるところを当たってみる（実際には、かわの会会員のカンパも多い）。

㋕参加賞を検討する

レースに参加してくれる市民のために何か手づくりの参加賞を考えたい。と、いつもスタッフは首をひねるのだが、なかなかいいアイデアが浮ばない。

㋖フェスティバル開催を皆に知らせる

さて、会場やコースなど実際の企画が決まったら、一人でも多くの市民に、レースに参加するか、または見に来てほしい。

aレース参加については、カヌー協会を通して知らせる。また、マスコミや情報誌でも取り上げてもらえるよう通知する。

b日頃から、この運河を身近に感じて生活している周辺の人たちには、是非このフェスティバルのことを知って見にきてほしい。そしてできればレースに参加してほしい。

そこで、チラシを刷り、手渡しをする。約二万枚。一軒一軒歩いて配るのは大変だが、住んでいる人の生の声が聞けるめったにないチャンスだ。

「えっ、どこでやるの？運河？運河って……ああ、そういえばあるわ」なんて人もいる。趣旨をよく説明して、見に来てくれるようおさそいする。

二度目からは、「楽しみにしてます、がんばって」と手ごたえのある声が聞けた。

スタッフも感激。

㋗レース当日の役割を決める

レース参加者だけで一五〇人以上。それに、一つの会場だけで収まる話ではない。時間と場所が複雑にからみあったスタッフ用のスケジュールが必要だ。それには、スタッフの確定が先決。そのための説明会を開いたり、口コミで確認していく。

役割は、受付、駐車場整理、本部づめ、検艇、カヌー積み込み、移動救助、撮映、固定救助、ゴール記録、カヌー引上げ、など。スタッフだけで約六〇人。選手と合わせて二〇〇～三〇〇人の人間が動き回ることになる。

㋘そして当日

さて、あとは当日使う器材類の準備を終えて、天候を祈るばかり……となるといいのだが。やはり、あれもやってない、これもまだと、フェスティバル前日になっても落ちつかない。

エエイ！いくらやってもキリないや、と寝てしまう人、心配で朝までオロオロしてる人、前祝いだ！と一杯やってる人など、スタッフ様々の一夜を過ごす。

早朝、頭がまだ寝ているままで会場に。本部のテントを張り終わる頃には、気の早い選手がチラホラ。だんだんと受付けがさわがしくなり、カヌー検艇、カヌー積み込み、開会式、選手の移動と、あわただしく時間が過ぎていく。

それから約一時間半。スタート地点の状況が分からない本部では、無事スタートできたのか、途中で事故でも……と心配だ。

もう着いてもいい頃、とソワソワしていると「来た来た来た！」の声。ゴールめざしてまっしぐらにパドルを操る姿が目に飛び込んでくる。途中の岸から、橋からの声援全部が聞こえてくるようだ。

しかし、感動にふけってばかりはいられない。次々とゴールする選手の記録をとらねば。と、このあとも閉会式、後かたづけといそがしい。

とにかく、感動とあわただしさの中、スタッフは大変なのである。

❸―大岡川クリーンフェスティバル in KAMIOOKA

カヌーフェスティバル成功！のまだ熱さめやらぬ頃、今度は大岡川の中流、上大岡で川そうじの話が持ち上がった。

それも、はじめは川にふたをして、道路と駐車場にしてほしい、と市に要望した地元商店街の人たちが、市との話し合いで発想を転換したためだ。

そもそもの背景は、駅前の大型店や、スーパーの影響を受けた旧街道沿いの商店街の活性化をいかにして行うか、ということであったが……。

「確かに、都市化が進み、上大岡駅も

横浜で三番目に乗降客の多い駅となり発展した。しかし、その反面、商店街の問題をはじめ、交通の渋滞、放置自転車が増加し、自然が減り、子供たちの遊び場が少なくなったことなど、様々な問題もかかえるようになった。そして、何よりも、ここに住んでいる人が、自分の町という意識を持てないでいるのではないか……。その端的な例が、川に捨てられたゴミだ。まず、自分たちの町で捨てたゴミを、自分たちの手で拾い上げ、コミュニティをつくるきっかけとしよう。川は商店街の裏を流れている。商店街の活性化もそこからスタートだ。そして、地域の人が自分たちの街として感じられるような商店街づくりをしていこう」と地元の人たちは考えるようになった。

そして、地元の人たちと「かわの会」で実行委員会をつくり、川そうじをお祭りとして行っていこうと企画した。

しかし、下に落ちないようにと、フェンスがしてある今の川では、自分たちの意志であっても、公に下に下りることは難しい。だから、そのための道具の手配や、上げたゴミの運搬も同じように公には難しいということだった。

でも、地元の人たちの意志は固く、実行委員会は連日夜遅くまで続いた。

昭和五十八年三月、小雨降る中、地元町内会、子供会、そしてかわの会らが集まった。参加者約一、〇〇〇人。四班に分かれ用意したはしごで続々と川に下り

写真―3

写真―4

図―4　クリーンフェスティバル in KAMIOOKA

ていく。あき缶、ビニール、タイヤ、自転車、バイク、ふとん……と何でも落ちている。故意でなくとも、一度落ちてしまうと、拾うことが難しいこれらのゴミは、半分はヘドロにうまっていて、堀るのも大変、そして、引き上げるのもローブで数人がかり。とにかく、上がったゴミは三〇トンにも及んだ。

川そうじが終わった後は、商店街の路上でもちつき大会、フロ屋の開放、こもかぶりを引き出してと、お祭り気分。そして川原では、バーベキューで一杯やりながら、実行委員が気勢を上げていた。

今ではこの川そうじ、「今度はいつやるの」と、地域の人たちから問い合わせがあるほど、楽しみにされているという。

このほかにも、「かわの会」が行ってきたイベントはあるが、ここでは割愛する。

六――イベントは効果も大きいが準備が大変――自主性が問われるイベントへの参画

昭和五十七年二月に発足した「よこはまかわを考える会」は、半年の助走期間を置いて、「夕涼み」「カヌーフェスティバル」「上大岡の川そうじ」とイベントをこなし、頭と身体で考えるソフトな市民グループという評判が定着した。

こうした会のイメージを背景に、毎月の定例研究会（表―1）などで、川や緑に関心のある市民や団体と交流を深めることもできた。

それに、ふだんでも人と話していて、「あの大岡川でカヌーレースをやったり、上大岡で川そうじをしたりしました」と言えば、「あ、知ってる」とか「へェー」とか反応がある。そこへすかさず、会報などを見せて、「ま、よろしかった

表―1　定例研究会のあゆみ

第1回	82・3・18	「水辺再生の事例について」森　清和（市公害研究所）
2	4・15	「ヨコハマにおける都市河川の可能性」宮村　忠（関東学院）
3	5・20	「現代の都市における治水」木下幸夫
4	6・17	「よこはま水辺の創造」田口俊夫（市企画調整局）
5	7・16	「中島川遊歩道構想について」片寄俊秀（長崎総大）
6	8・20	「よこはまの都市河川について」吉村伸一（市河川部）
7	9・17	「横浜の原風景・運河の再生をめざして」山田弘康（横国大） 板谷龍二郎（MANU）
8	10・29	「よこはまの水環境の現状について」磯ちず子（市公害対策局）
9	11・19	「都市河川を考える」品田　穣（真間川流域研究会）
10	12・18	「かわを考える会の1年をふり返って」
11	83・2・18	「世界のかわ」白瀧敏弘（市都市計画局）、大門京子（技研）、 門脇容子（市緑政局）磯ちず子
12	3・15	「都市の水辺づくり」進士五十八（東京農大） 「大岡川の歴史」石橋友治（市下水道局）
13	4・15	「水辺の魚と生物」樋口文夫・畠中潤一郎（市公害研究所）
14	5・20	「水緑空間の構造」渡部一二（多摩美大）
15	6・17	「ゲンジボタルを守りつづけて」丸茂　高（戸塚ホタル研究会）
16	7・15	「都市の緑を守る」萬羽敏郎（緑区自然保護懇話会） 森　啓（神奈川都市緑化政策連合）
17	8・19	「都市水害と住民」鈴木和夫（戸塚から水害をなくす会）
18	9・16	「都市と水問題」村瀬　誠（ソーラーシステム研究グループ）
19	10・21	「まちづくりウォーキング」千賀義二（緑区地区カルテ研究会）
20	11・18	「まちづくりにかかわって」佐々木一郎（横浜市大）
21	12・10	「かわを考える会58年をふりかえって」
総会	84・1・21	「全国水辺事情」山道省三（とうきゅう環境浄化財団）
22	2・17	「都市河川再生の論理と課題」吉村伸一
23	3・16	「水文学入門」長沼信夫（駒沢大）
24	4・20	「かわそうじとまちづくり」田中栄治（ドゥ,タング,ダイナックス）
25	5・18	「横浜の源流域」佐藤寛行（市公害対策局）
26	6・15	「都市の魅力、橋の魅力」伊東　孝（東京の橋研究会）
27	7・19	「水土蘇生をめざして」室田　武（一橋大）
28	8・17	「流出抑制対策の現状」石橋友治（市下水道局）
29	9・21	「石けんのはなし―合成洗剤との違いわかりますか」 渡辺暁子（生活クラブ旭支部）
30	10・15	「その後の中島川―アメニティとセキュリティの統一は可能か」 片寄俊秀（長崎総大）
31	11・15	「都市自然の生活化とコミュニティ形成」村橋克彦（横浜市大）
32	12・21	「都市と川」三木和郎
33	85・2・15	「街が僕らの遊び場だ」子どもの遊びと街研究会
34	3・15	「河川環境とは何でしょうか？」北村真一（山梨大）
35	4・19	「横浜の緑地と農業」片田卓夫（市緑政局）
36	5・17	「横浜農山村の想い出」飯村　武（県自然保護センター）
37	6・21	「中津川を守りつづけて」馬場勝彦（盛岡世代にかける橋代表）
38	7・19	「ホンモノの親水空間を求めて」望月史郎（千葉大、真間川流域研究会）
39	8・23	「アメリカの水辺・風景・街並・スライドショー」 矢加部正子（市緑政局） 荒木田百合（市都市計画局） 岩井陽一（日本工営）
40	9・20	「河川にフェンスは必要か？」林　良二（横浜法律事務所）

ら」と、ソフトに研究会などにさそうことができるようになる。

また、これだけのイベントを成しとげたという自信が、会員を、より積極的にし、何にでも食いつくドブ川のハゼのようなたくましさを育てていった。

昭和五十八年夏には、大阪、小樽と続いた水都再生シンポジウムを東京で開こうと新橋の街並保存連盟を事務所にして、準備が進められてきた「水辺環境シンポジウム」が世田ケ谷で開かれた。テーマは「市民と行政の役割」。全国の水辺再生に取り組む市民グループや自治体が参加した。「かわの会」は、準備段階から参画し、シンポジウムの中でも、イベントを中心に発表が行われ、全国にも名前が知られるようになった。また、一緒に準備をした多くの水辺研究者とも親しくなった。

こうした会の発展の背景には、長崎の「中島川まつり」や小樽の「ポートフェスティバル」そして東京の「野川・わんぱく夏まつり」など全国的に水辺再生運動が盛り上がっていたことがあった。

そして、この水辺に対する関心の高まりは、行政もまき込んで展開する。最近、多くの自治体などで、水辺に関するシンポジウムやイベントが行われるが、横浜でも昭和五十九年に「水辺のある街づくりシンポジウム」が行われたことは記憶に新しい。

それに今年にはいって、「カヌーフェスティバル」が、下水道整備に伴う行事として、神奈川県で唯一、建設省により全国〝水辺の風物詩〟に選ばれた。これは、「カヌーフェスティバル」開催の趣旨とは違うが、このイベントが社会的にも認知されたことを示すものであろう。

このように、イベントを行うことは、それを実行した組織の評価にもつなが

表―2　「よこはまかわを考える会」の主な活動

82・2・15	「よこはまかわを考える会」発足（27人）
3・1	ニュース創刊
4・4	独川の散策と柏尾堤の花見会
5・6	相模川水生生物・野鳥の観察とバーベキューの会
6・7	ホタル観察会（こども自然公園）
6・19	コンクリート・カヌー試乗会（待従川、関東学院）
7・30	屋形船にて大岡川夕涼みの会
10・9～11	仙台・盛岡のかわを見る会
10・24	第1回横浜縦断カヌーフェスティバル
11・3	中島川石橋群復興署名活動（数寄屋橋）
83・1・21	第2回総会
3・27	大岡川クリーンフェスティバル in KAMIOOKA（クリーン作戦）
4・2	同上　（まちづくりと水辺を考えるつどい「かえってこい大岡川」）
4・3	同上　（記念植樹と魚の放流）
5・22	相模川であそぼう
6・10	ホタル観察会（こども自然公園）
7・10	二ケ領用水を見る会
7・29～31	郡上八幡を見る会
7・31	夏まつりリフレッシュ上大岡'83
8・6	水辺環境シンポジウム『都市と水辺と市民の役割』（世田ケ谷）
8・7	水辺環境シンポジウム　川見会
9・23	鶴見川サイクリング、赤田地区の見学
10・9	カヌーフェスティバル河川清掃
10・14	カヌーフェスティバル『映画の夕べ』前田陽一監督を迎えて
10・16	第2回横浜縦断カヌーフェスティバル、水上音楽祭
11・13	帷子川めぐり
11・23	県立自然保護センターを訪ねて
12・4	円海山バードウォッチング
84・2・22	帷子川発見団の発足
3・25	子供たちと共に帷子川上・中流域踏査
3・31	同　下流域踏査
4・16	「横浜下町文化祭」中村川の映画『あしたはあの頃のようでなく』の上映会、地元バンドの演奏など。三吉演芸場にて
4・22	森戸川を見る会
5・13	宮ケ瀬ハイキング
5・20	大岡川クリーンフェスティバル　in KAMIOOKA'84
6・17	玄海田・新治谷戸めぐり
7・20～22	絵本グループ信州の旅
8・2～6	四国「四万十川」を見る会
8・25	大岡川夕涼みの会
9・23	三島・柿田川湧水群を見る会
10・13	帷子川発見団湧水調査
10・21	カヌーフェスティバル河川清掃
10・28	第3回横浜縦断カヌーフェスティバル、水上音楽祭
10・31	流域地名研究会発足　記念講演　谷川健一（日本地名研究所）
11・18	野火止用水見学会
12・21	よこはま水辺賞発表
85・1・13	流域地名研究会「負勝川踏査」
1・18	「世界の街づくり絵本」延藤安弘（京大）
1・19	横浜水辺セミナー「水掛論」対談形式のシンポジウム　宮村　忠（関東学院）進士五十八（東京農大）
2・24	帷子川源流域を見る会
3・19～20	子安浜で撮った映画『遠い海』の上映会
3・23	滝の川源流域を見る会
4・6	石崎川でお花見
4・7	流域地名研究会「独川上流域踏査」
4・21	大岡川クリーンフェスティバル in KAMIOOKA '85
6・8～9	横浜ホタルのつどい参加
7・20	大岡川夕涼みと花火見物
8・24～25	和泉川親水広場でキャンプ
9・15	子供会議助言
9・28	カヌー試乗会
9・29	流域地名研究会「待従川踏査」

り、その効果は大きい。

しかし、それだけにイベントを準備する実行委員も大変だ。ボランティアとはいえ、自分の仕事との両立に悩むこともあるだろう。また、人に頭を下げることの多い活動だけに、こんな思いまでしてとぐちの一つもこぼれるかもしれない。だけど、自分で好きでやっているのだからと、イベント終了までは頑張れるだろうし、イベントの成功で報われることも多いであろう。でも、この努力を、来年も、またその次の年も続けていくのかと思うと、うーむと考えてしまう。

特に、責任感が強くて、イベント準備の大変さを身をもって味わった人ほど、二回目以降は少し距離をおいて、という気持ちになるのも無理はない。

しかし、実行委員がイベント準備にいそがしくなる頃には、この少しの距離が随分大きく感じられるものだ。そして、それは、自分の自主性が自分に問われているようで、「何かうしろめたい」「よくやる人に悪い」なんて気持ちにもなりかねない。

大きな組織になればなるほど、中心でよくやる人と、そうでない人、そうできない人との間に溝をつくりやすい。会員の自主性を尊重する「かわの会」も、同じ問題をかかえていると思う。

七――イベントに必要なもの

最後に、これまでのかわの会の主な活動をふり返ってみる（表―2）。

月一回の定例研究会と事務局会議、そして会報の発行をベースに、様々なことが行われてきた、これ以外の活動、そして、準備のための打合せ、特にイベントの実行委員会回数を考えると、年がら年中活動しているようなもの、こんなあわただしさが、イベントを行うのには必要なのかも知れないし、イベントを行うために、そうなっているのかも知れない。

多くの人が、川の良さを体験して、肌でその価値を感じとってほしいと始めたいくつかのイベントは、市民だけでなく、それをしかけた、「かわの会」の活動自体をもまき込みながら、今も続いている。

「カヌーフェスティバル」は、年々、レースに参加する選手が着実に増えている。一度参加した選手のほとんどは、次の年も、またその次も参加する。ふだん人里離れた清流でしか競技を行わない選手にとって、この都市河川である運河で町の人の声援を受けながら漕ぎ抜くうれしさは、他では味わえないという。まさしく、運河でしか味わえない価値を、身をもって体験している、と言えるのだろう。

だから、今後は川沿いの人たちが、声援を送る側から、だんだん送られる側にもまわれば、地域のフェスティバルとして、そこに住む人たちの手で、企画運営される日も近いと思うのだが。

それは、上大岡の「クリーンフェスティバル」では既にはじまっている。地域の人が川に下りる体験を楽しみにされているので、声をかければ人は集まる。もう、ほとんど地元の人たちの手で運営されている。

そして、今後の「かわの会」は、準備が楽な割に効果の大きかった「大岡川夕涼み」をいろんな川で体験しながら、のんびりと次のイベントでも考えられるといいんだがなあ……。

以上は、とりとめもない一会員としての見解ですので、「他の会員の意見も聞きたい」、「もっと会のことを知りたい」という人はもちろん、「自分には合わない」「やっぱりドブ川はドブ川だ」と思う人も、一度は体験してみませんか、かわの会のドブ川イベントを。

そして、「よろしかったら研究会にもどうぞ。」

＜よこはまかわを考える会＞